26 寮母はたたっかれ放しか？

カーテンが閉められた中でおむつ換えが行なわれているが、何か異様です。

のぞいたとたん、Aさんの力いっぱいの平手打ちが寮母のホオに。それでも寮母は黙々とおむつ換えを続けています。――私は意識的にAさんをどなりました。

「おむつを換えてもらいながら、寮母さんをなぐるとは何かっ！」。ぼけていても負けてはいません、「お前はだれかえ？　寮母なんかたたいてどげーあるかっ！」「こげんとこ好かん！」。私も言い返す、「ここが気にくわんなら家にお帰り！　家で嫁たちがたたけるか！」。

一瞬、Aさんがにくかった。しかし、すぐ私が代わりにたたかれたい、と思った。寮母への熱い思いが、ぐっと胸に迫ったからでしょう。たたかれる母のこの姿を伝え聞いた子なら、「お母さん！　任運荘もうやめよっ！」と泣いて訴えるに違いないでしょう。

「痛かったでしょう。こらえておくれ」。私のせいいっぱいの言葉。「いいえ、Aさんは病気ですから……」。二人がかりならよいが、一人で世話をする時が危なく、この人にたたかれない寮母はいないほどで、家にいたころは鎌を持っ

て嫁を追い回していたとか。

大男の場合はすごかった。おむつを見ようと足元にしゃがむ寮母の顔めがけてけったのです。眼鏡が飛ぶ、体がひっくり返る。寮母は自制をこめて一言。「どうしてけるの？　おしめ換えているのに」。通りかかった園長は「口ごたえはいけない。プロの寮母ではない」と、たしなめる。

老人介護の本質はどんな老人でも全面受容すること、高齢者の人権の尊重です。同時に寮母の人権も尊厳です。両者が容易に一致しないのが福祉の現場です。

寮母職とは何でしょう。老人ホーム職員の過半数が寮母ですが、資格もいらずだれでもなれる職。母は女であればだれでもなれるのによく似ています。それ以上に両者の役割が本質的に相似ています。

母あってこそ家族の平安があり、その母を家族皆が助ける。それが最良の家庭。寮母のホームでの役割もそれと全く同じです。家に母、ホームに寮母——

長崎県岐宿町の特養ホーム「きじの里」風景――「おむつの随時交換と、おむつ外しに全力投球しています」と語る神之浦園長。

これが施設運営の根幹です。

ホームには、園長に次いで生活指導員が必置条件。高齢者に対して指導員、何という尊大な職務であり、愚かしい職名であろう。一刻も早く絶対廃止されるべき職です（任運荘は相談員と変更）。ほかに、事務員、看護婦、栄養士、調理員。えてしてこれらの職からして、介護にまみれる寮母職を低く見がちで、指図さえしかねません。

母が単なるお手伝いに過ぎ

ないなら、家はもう家でない。同様に、寮母がお手伝いの位置に引き下げられたままなら、ホームは本当のホームではありません。

たしかに寮母たちには常に大小の失敗が伴いがちです。それは寮母職の宿命です。母の失敗は家族が愛で補う。母は愛の中心だから。ホームの場合は逆で、他の職種は高みの見物をきめ、まれには叱責と冷笑さえ投げかける。いわば、一番のしかられ役、最も損な立場です。

寮母が愛の中心であることはまず、ない。それどころか、ホームの利用者からも時にけられ、引っかかれ、「おむつ換えの下卑た仕事」「わしらが食わしている」と暴言を吐かれる。仕事の意義を知ればこそガマンできるのです。「職業は？　と問われて、〝おむつ換えをさせてもらっています〟と自信をもって答えられる寮母でありたい」(長崎・きじの里便り13号、柏タケさん)。ああ、なんといじらしい若き寮母さんの言葉でしょう。

寮母は日夜、たくさんの要望に応ずるために飛ぶように働いています。この人たち以上の〝宝〟がこの世にあるだろうか。評論家の樋口恵子さんは、寮母

を「日本のお嫁さん」と称えていました。

「いつくしみ育てもなさぬ人びとに守られて吾死後を頼みぬ」（神戸・万寿園）。お世話の本質に迫る寮母賛歌です。

さて、この問題で私はホームの全員に声高に訴えました。

――寮母は〝宝〟です。絶対たたかないで下さい。たとえ、ぼけのせいでも、寮母さんがたたかれるのはとてもつらい。たたくなら、私が代わってたたかれたい。寮母さんはいわばホームの母。その母を心の中で見下す人を私は許せない。お年寄りも職員も寮母を大事にする。寮母また本気でお世話する。そうであってこそ、ここに楽園が出現するのです――。

胸がつまって、これ以上言えませんでした。この機会に、あれも言おう、これも言おうと思っていましたが。どんな理由があろうとも、ひとが叩かれているのを放置することは許されてはなりません。暴力は荒廃を生むだけです。